

今知りたい、頑張る生産者の情報フリーペーパー

2025
Feb

となりの農家さん

take
free

特集

スペンシャルインタビュー

青森県平川市 福士ラボ

地域平均2倍以上の
収量の秘密に迫る

福士ラボ

福士和彦

5ヶ月間の ミニトマトの収穫

青森県平川市は全国的にりんご生産が有名だが、ミニトマト生産でも東北地方トップクラスである。冬の寒さが厳しいこの地域では、一般的に雪解け後の6月中旬から次の雪が降り始める11月中旬までの約5カ月にミニトマトを収穫する。

ここで、家族4人100坪のハウス4棟でミニトマトの生産をし、毎年地域平均を大幅に上回る収穫をしているのが福士和彦だ。

農業への挑戦と壁

就農前、福士は長らくJA職員だった。JAでは総務や経済部門だったものの、農業に近い環境にいたこともあり、38歳の時「農業に挑戦しよう」と決意した。

ただ、家族や親族に農家はおらず、農地や軽トラなどの農業資材を何も持ち合わせていなかった。そんな状態から農業を

始めるにあたり、所属JAから比較的取り組みやすいとアドバイスを受けたミニトマトの栽培を選んだ。

JA職員であったとはいえ、ミニトマトを栽培するといつても、いったい何をすればいいのか、当初は右も左も分からない状態であった。福士は農業の基本的な知識や技術を習得するために、就農1年目に師匠と仰ぐ生産者の下で苗植えから収穫まで一連の流れを学び、土壌の管理や病害虫の対策など、細かな技術も身につけた。2年目に独立した際には、これまでの経験を活



福士が所有するハウス4棟

かして自分なりの工夫を加えな その量を作ることができた。がら栽培を進めた。1年目に 同時に、独立してすぐの自分がある程度流れをつかむことができた。これだけできたのだから、もっときたこともあり、独立初年度、できるだろうとも思った。当時の福士の感触としてはそこ

追求しながら品質レベルも向上させるといったバランスの組み合わせなど、質・量ともに自分が掲げた目標にはなかなか届かず、大きな壁にぶつかっていた。

科学的アプローチ

なんとしてもこの壁を乗り越え、自らが納得いくミニトマトを生産しなければならぬ。そんな想いを胸に、福士は師匠の下で学んだ一連の流れに対し、これまで以上に真摯に向き合った。

その一環として、経験不足を補うべく、多様なセンサを設置するなど科学的なアプローチに取り組んだ。客観的な指標を基に不足しがちであった微量要素など必要な栄養素を補うことで、少しずつ生育環境を改善することができ、質・量ともに向上していった。

しかし、ミニトマトの生育に効果があると言われている「鉄」だけは、様々な資材を試したものの、どうしても数値が上がらず、長年悩み続けていた。

新たな資材の導入

そのような中、独立して10年を迎えた2024年にサカタのタネの営業担当者に相談したところ、鉄力あくあF14という製品を紹介してもらった。

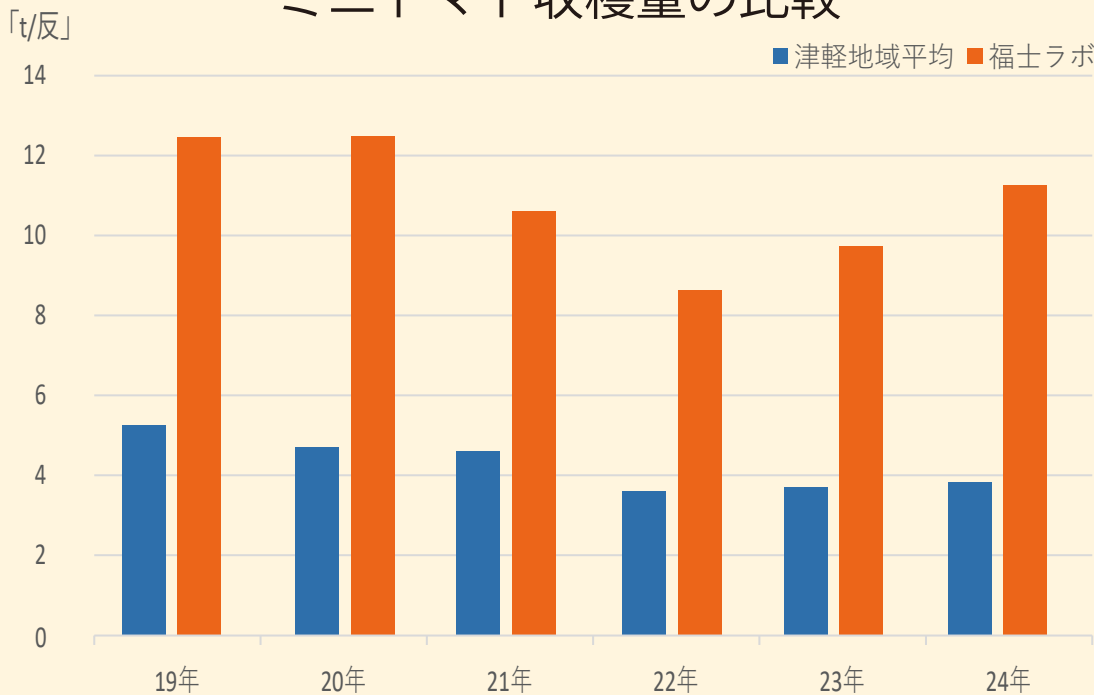
この地域は約5カ月の短期間に集中して収穫するため、ミニトマトへの負担が大きく、なり疲れが発生しやすい。しかし、鉄力あくあF14は効果的に二価鉄を供給できるため、なり疲れ対策への効果が大きいとのことだった。

以前から福士はその製品が気に入っており、理想のミニトマト生産をするために必要な資材だと思い、導入を決心した。定植した次の日から毎日、葉面散布をスタートさせる中、1週間に1回、鉄力あくあF14の葉面散布を実施。茎の樹液分析をしたところ、これまでの悩みが何だったのかと思うほど、鉄分の数値が改善していた。さらに、葉の色や形、厚みがよくなっており、見るからに元気な樹姿になっていった。

2024年は、この地域も天候不順の日が多く、ミニトマト生産が不調な年だったが、福士は単収を上げることができ、就農してからトップ3に入るほどの収穫量を達成した。さらに秀品率も例年平均で約95%から約97%に向上した。

今後は、鉄力あくあF14を葉面散布だけでなく養液にも混合することで、これまで以上に効果的に鉄分を補給して、より元気なミニトマトを栽培したいと考えている。

ミニトマト収穫量の比較



福士ラボの反当たりの収穫量は毎年地域平均を大きく上回っている

福士が愛用している

「鉄力あくあF14」



科学と感性のバランス

富士の農園を訪れると、必ずと言っていいほど、いつも富士はハウスの中にいる。日々のミニトマトの変化を肌で感じ取っているのだ。

就農当初は経験のなさを科学的なアプローチで補っていたが、今では経験を重ねるにつれて養

われてきた「感性」も大切にしている。科学的な観点から組み立てた肥料設計をベースとしつつ、日々樹と会話しながら、人の都合に合わせてミニトマトの都合に合わせるといった具合だ。

このように科学と感性のバランスを大事にしながら、富士は新しい挑戦を続けている。

「この地域のミニトマト生産の限界はいつどこにあるのか？」

「どうすればその限界を突破できるのか？」

その答えを見つけるため、富士の探求は終わらない。

富士ラボプロフィール

青森県平川市に位置する富士ラボでは、ミニトマトの栽培を行っています。科学的アプローチを駆使しつつ、そこに経験から培った感性を加えた生産方法により、高い単収と秀品率を誇ります。また、富士ラボのミニトマトは、その甘さと風味の良さで高い評価を受けています。

鉄力あくあ® F14

愛知製鋼とサカタのタネが共同開発した高機能液肥。植物の生育に欠かせない微量要素を手軽に補給できます。特に吸収しにくい鉄は植物が吸収しやすい2価鉄の形で供給することができます。

3000〜5000倍に希釈して使用するので高コストパフォーマンス。微量要素欠乏症の緩和、根量増加・根を太くする、光合成・呼吸の代謝向上などの効果が期待できます。

製品の詳細情報は以下をご覧ください。

「鉄力あくあ®」は愛知製鋼の登録商標です

あとがき

富士さんを取材する中で、絶えず新しい挑戦を続け、理想のミニトマト生産に近づこうとする姿が、まるで農業生産の研究者のようで非常に印象的でした。このような農家さん一人ひとりのストーリーを紹介することで、「となりの農家さん」のことを少しでも知っていただき、農業生産の参考になれば幸いです。

鉄力あくあ F14 の HP



樹液分析による鉄の成分値の比較

23 年まで鉄の成分値が「やや低い」であったが
24 年に鉄力あくあ F14 を使用した結果「適正」に改善した

2023 年 6 月（鉄力あくあ F14 施用前）

No.1.2 ハウス

	低い	やや低い	適正	やや高い	高い
鉄					

No.3.4 ハウス

	低い	やや低い	適正	やや高い	高い
鉄					



2024 年 6 月（鉄力あくあ F14 施用後）

No.1.2 ハウス

	低い	やや低い	適正	やや高い	高い
鉄					

No.3.4 ハウス

	低い	やや低い	適正	やや高い	高い
鉄					

提供メーカー：サナテックシード